



カントウータ
Cantuta

No. 55



聖山イリマニとラパス 写真提供：風景写真家・松井 章氏

1. 第15回日本-ポリビア国際医学・消化器シンポジウム…森下 鉄夫
2. 三題断：サンバとラーメンとポリビアの日系人と ……永井 和夫
3. 初のアフリカ大陸・・タンザニア滞在記（その3） …上崎 雅也
4. ポリビア開拓記外伝—コロニアオキナワ
疾病・災害・差別を生き抜いた人々—（7） ……渡邊 英樹

一般社団法人日本ポリビア協会
ASOCIACIÓN NIPPON-BOLIVIA

1. 第15回日本-ボリビア国際 医学・消化器シンポジウム

一般社団法人日本ボリビア協会副会長
特定非営利活動法人
日本-ボリビア医療友好協会 理事長
森下 鉄夫

第15回日本-ボリビア国際医学・消化器
シンポジウム(XV Simposio Internacional
Boliviano-Japonés de Medicina y
Gastroenterología)が、昨年(2023年)9月28
日・29日にボリビアのサンタ・クルス・
デ・ラ・シエラ(サンタクルス)で、日
本-ボリビア医療友好協会とボリビアキリ
スト教大学(Universidad Cristiana de Bolivia,
UCEBOL)の共同主催のもとで開催されま
した。

第14回シンポジウム(2019年10月24日・
25日)以後コロナ禍のため延期され、4年
ぶりの開催となりました。今回のシンポ
ジウムは、ボリビア側会長をUCEBOL学
長のDr. Soo Hyun Chung、事務局長をDr.
Jorge Nakamura Kina、事務局次長をDr.
Kenji Limpias Kamiyaが務められ、日本側会
長は森下が務めました。Dr. Nakamuraは慶
應義塾大学整形外科に留学され、Dr.
Kamiyaは慶應義塾大学大学院消化器内科
に留学され博士号を取得されました。

9月27日午前4時10分にサンタクルスのピ
ルビル国際空港に到着し、Dr. Nakamura
ご夫妻とDr. Kamiyaが迎えてくださいま
した。シンポジウムはUCEBOLの講堂で行
われ、開会式ではボリビアの人気ダンス
Sayaも披露されました。

サンタクルス消化器病学会会長Dra.
Maida Castro Cortez、スクレ消化器病学会

会長Dra. Yanet Lijeron C.をはじめ2日間に延
べ221名の医師・医学生や国際協力機構
(JICA)ボリビア事務所の前田恵理子氏が参
加されました。



写真1-1 開会式ではダンスSayaも披露された。



写真1-2 会場での講演(森下)

シンポジウムでは日本人医師7名とボリ
ビア人医師1名が講演されました。後述の
加藤先生、細江先生、Dr. Poma、森下の4
名が会場で講演し、鈴木先生、石橋先生
康先生、三浦先生の4名は日本よりズーム
講演をされました。

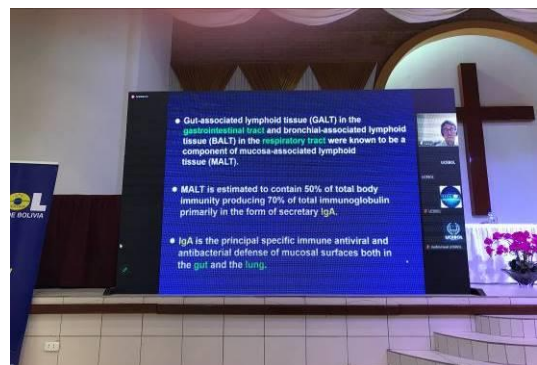


写真1-3 日本よりのズーム講演(康先生)

講演は日本人の癌の現況、胃癌の診療・予防、消化管癌の内視鏡治療、炎症性腸疾患の内視鏡検査、クローン病の治療やシャーガス病の巨大結腸症、日本在住ラテンアメリカの方々のシャーガス病、経腸栄養と腸管免疫などが、各60分英語で行われスペイン語に逐次通訳されました。また、胃腸の内視鏡診断について若手医師へのクイズ形式による教育セッションも設けられました。さらに29日午後には加藤先生と細江先生及び内視鏡チームによりClinica Nuclearで大腸ポリープ(腺腫)に対し、内視鏡切除術であるESD (Endoscopic Submucosal Dissection、内視鏡的粘膜下層剥離術)をデモンストレーションし、会場へ実況中継されました。ESDはボリビアで初めて行われ、多くの方々に感銘を与えました。



写真1-4 日ボ内視鏡チームが結成された。



写真1-5 内視鏡切除術施行中、右は大腸ポリープの内視鏡像で切除された(加藤先生・細江先生)

後日、患者様が開腹手術になるところを内視鏡手術で済んだと大変喜んでおられると報告をいただきました。

シンポジウムには前述のごとく221名のボリビア人医師・医学生が出席されました。第1回(1962年)から第15回シンポジウムまで延べ221名の日本人医師、1名の日本人看護師、4,807名のボリビア人医師・医学生、297名の他国の医師、24名のボリビア人看護師と合計5,350名の関係者が参加されました。

滞在中、交流会館・診療所・日本語普及学校が開設されているサンタクルス中央日本人会 Centro Social Japonés de Santa Cruzに案内していただき、改めて日系の皆様のご努力に感銘を受けました。

サッカーはボリビアで人気のあるスポーツですが、高い実績を誇るサッカー学校のTahuichiにもお邪魔し、健康管理、安全・衛生管理もお聞きしました。

また、日系医師の方々が歓迎懇親会を催していただき、Casa del Cambaでチュラスコ料理やワニ料理をいただきながら、今後の日本とボリビアの医療協力を話し合いました。ボリビア料理が続いた後は日本料理店のKenにも案内していただきカツ丼やカレーライスもいただきました。

29日には日本側による答礼レセプションがスイス・イタリアレストランCharet La Suisseで行われました。感謝状や記念品の贈呈など和気藹々と楽しい一時を過ごすことができました。

Dr. Chungそしてシンポジウムの準備・実行から滞在中のお世話までしてくださ

いましたDr. Nakamura, Dr. Kamiyaをはじめ
 Dra. Sayuri Igarashi, Dr. Jorge Katsuo Inoue, Dr.
 Chikara Uechi, Dr. Juan Eiki Nishizawa, Dr.
 Kenji Nitabara、そして御講演くださいまし
 た加藤元彦先生（慶應義塾大学医学部内
 視鏡センター教授）、細江直樹先生（同
 センター准教授）、Dr. Reynaldo Mendoza
 Poma（Cirujano Gastrointestinal, UCEBOL）、
 鈴木翔先生（国際医療福祉大学医学部消
 化器内科教授）、康祐大先生（同大消化
 器外科教授）、石橋史明先生（同大消化
 器内科講師）、三浦左千夫先生（長崎大
 学熱帯医学・グローバルヘルス研究科客
 員教授）に深謝申し上げます。



写真1-6 日系医師の方々による歓迎懇親会



写真1-7 日本側による答礼レセプション

今回、日本よりボリビアへのズーム講
 演や内視鏡治療の現地での施行・実況中

継は初めての試みでありましたが、皆様
 の絶大なご協力で極めてスムーズに行わ
 れ、大変嬉しくありがたく存じました。

なお、サンタクルスではマスク姿の人
 は一人もいなく、医療者間でもコロナに
 ついての話題は皆無でした。私たちは打
 ち解けた雰囲気のもとに国際友好を楽し
 みながら当シンポジウムを、消化器のみ
 ならず基礎・臨床医学の各領域、さら
 には看護領域やコメディカル領域も含めた
 学際的学術集会、および若手医療者の教
 育集会へ発展させることを目指していま
 す。既に、消化器病学に加え、微小循環
 学、微生物学、感染症学、熱帯医学・寄
 生虫学、医化学、小児科、整形外科、泌
 尿器科、皮膚科、呼吸器科、腫瘍学、総
 合医学、予防医学、歯科・口腔外科、看
 護学医療系コンピュータテクノロジー領
 域の先生方が御講演くださっています。

このシンポジウムが医学・医療を通し
 て日本とボリビアおよび南米との友好・
 親善・協力を少しでもお役に立てればと
 願っています。 (終わり)

参考文献：(WWaves：日本癌病態治療研究会誌)

- 1) 森下鉄夫:日本・ボリビア医療友好協会. WWaves、9:26-27,2003
- 2) Morishita T.: Non profit organization Japan-Bolivia association for medicine and friendship. WWaves、14:102-103,2008
- 3) 森下鉄夫第9回日本-ボリビア消化器国際シンポジウムと第30回パンアメリカン消化器病学会特別シンポジウム WWaves、13:24-25,2007
- 4) 森下鉄夫第10回記念日本-ボリビア消化器国際シンポジウム WWaves、17:34-35,2011
- 5) 森下鉄夫第11回日本-ボリビア国際消化器シンポジウム. WWaves、19:51-52、2013
- 6) 森下鉄夫第12回日本-ボリビア国際医学・消化器シンポジウム. WWaves、22:21-22,2016.
- 7) 森下鉄夫第13回日本-ボリビア国際医学・消化器シンポジウム. WWaves、25:28-30,2019
- 8) 森下鉄夫第14回日本-ボリビア国際医学・消化器シンポジウム. WWaves、27:26-28,2021

2. 三題噺：サンバとラーメンと ボリビアの日系人と

一般社団法人日本ボリビア協会常務理事

永井 和夫

1. サンバと

サンバと言えばブラジル、そしてリオデジャネイロのサンバ・カーニバルが有名ですね。でも、ブラジルでは、リオデジャネイロだけではなく、多くの都市でサンバ・カーニバルが開催されます。ブラジルのアマゾンにある日本人移住地トメアスに滞在していた時、アマゾン川河口の町ベレーンに行きサンバ・パレードを見学しました。ベレーンは南緯2度に位置する熱帯降雨林の町。午後になるとスコールがアスファルト道路を叩きつけます。スコールのあとはじっとりとした暑さが戻ります。暑さの戻った夕方、ベレーンの町中をサンバチームの行進が始まりました。打楽器チーム（バテリア）は初めゆっくりしたリズムから。すると、ヘピニキの合図とともにスルド、カイシャ、タンボリン、ショカーリヨが加わり躍動的なリズムへと変わりました。と同時に何百という若者からなる集団がリズムに合わせ、水しぶきを上げ踊り前進します。躍動的なリズムに変わった瞬間、鳥肌が立ち高揚を覚えました。一緒に前に進めと。1978年の話です。

2011年10月、定年で仕事を辞め自由の身となりました。と、その時、30年以上も前にサンバ・パレードの時感じた高揚感が私の身体によみがえりました。あの鳥肌は何だっただろうかと。幸い、私の住む常磐線沿線の松戸市にエス

コーラ・デ・サンバ（サンバ学校）がありました。フロール・ジ・松戸・セレージャ（松戸桜の花びら）と言います。

サンバ学校に入りました。63歳の時です。フロール・ヂ・松戸セレージャの設立は2001年1月、千葉県松戸市五香にある「13湯麺(カズサン・トンミン)」というラーメン屋で発足しました。今回の話は「13湯麺(以降トンミンと呼びます)」の店主、松井一之さん、通称マスターが主人公です。

フロール・ヂ・松戸セレージャのホームページには「セレージャについて」として、その設立の経緯が記載されています。

『ブラジルのお酒でカシャーサ、通称“ピンガ”というサトウキビから作った焼酎がありカイピリーニャと呼ばれる代表的なカクテルがあります。作り方は、ロック・グラスにライムのぶつ切りと砂糖を入れ、スリコギのような棒で（勿論普通のスリコギよりは細く小さいものですが）押しつぶし、そこにクラッシュアイスを手盛り入れて、ピンガを注ぎ良くかき混ぜて出来上がり。最初は強い口当りですが、氷が溶けちょうど良くなって、三杯も飲んだ頃には「いいカンジ」になっています。マスターの店「13湯麺」でこのカイピリーニャをこよなく愛する仲間が、「酒ばかり飲んでいてもしょうがないから、何かやろうよ」ということから「サンバ！」に結びつき、有志がお金を出し合い、知り合いにお願いしてブラジルから楽器一式を直輸入し、最初「お弁当屋さんの工場」で月に2回の練習から始まっ

て、現在は「森のホール」で月に3回行なっています。』（著者一部加筆）

2001年に設立された松戸セレージャは2002年の浅草サンバ・カーニバルに出演し、2010年にはS-1リーグ（トップリーグ）に昇格しています。以降、現在に至るまで浅草サンバ・カーニバルのトップリーグにいます。また地元の松戸市で毎年セレージャショーを開催し、2023年に第8回を数えるまでになりました。松戸セレージャの代表（プレジデント）は設立から2020年まで、トンミンの松井さん（マスター）が勤めています。



写真2-1 浅草サンバ・カーニバルのセレージャチーム（バテリア）

マスターのサンバ熱は尋常ではありません。チームの練習日やサンバのイベントがある時はラーメン店が休みとなります。不定期に休みとなるため店まで行って初めて休業を知ることになるお客さんもいます。それでも、客足は途切れません。そう、自家製麺と深い味わいのスープ、誰もが認める一級品です。マスターのサンバ熱はこれだけではありません。毎年、仲間を募りブラジルまでリオのカーニバルを見に行きます。ラーメン店は一時休業となります。



写真2-2 トンミンの入り口 サンバ・イベントのポスターが飾ってある

2. ラーメンと

マスターがリオのカーニバルに行った際、サンバを見るだけではなく、もう一つの活動があります。リオデジャネイロの日本領事館に、日系人協会を対象としたラーメン作り講習会開催を提案していたのです。2012年にリオデジャネイロ、2013年にクリチバの日系人協会で行いました。ブラジルではその後もサンパウロ、アサイでもラーメン講習会を開催しています。講習会を契機としてクリチバでラーメン店を立ち上げた人がいると聞きます。

2000年からのトンミンのラーメンファンであり続けたNさんは、マスターがリオのカーニバルに行く時に日系人を対象にラーメン講座を開催していると聞きました。このNさん、実は公益財団法人海外日系人協会の職員、そして海外日系人協会はJICA（独立行政法人国際協力機構）から日系人を日本に招き開催する多くの研修コースを受託しています。その中に「食を通じた日系団体婦人部活性化」コースがあり、このコースにマスターを講師としたラーメン教室を組み込むことが

できないか提案、2017年から研修プログラムの中にラーメン教室が加わりました。

ボリビアの日系人と

この日系団体婦人部を対象とするJICA研修で、講師のマスターが毎年リオのカーニバルに行き、そして日系人団体を対象にラーメン教室を開いていると聞いたボリビアの参加者から、機会があったら是非ボリビアで講習会を開催してほしいとの依頼がマスターにあり、2019年実現しました。

松井夫妻はリオからボリビアのサンタクルスまで飛び、そこからサンファンそしてオキナワの移住地に向かい、両移住地の婦人部の協力を得て、そして、当初予定にはなかったサンタクルスの日系人の要望にも応え、計3か所でラーメン教室が開催されました。



写真2-3 サンファン移住地でのラーメン教室を終えて

さー、これで一見何の脈絡もないサンバとラーメンとボリビアの日系人が繋がり三題噺が出来上がりました。松井マスターの力です。マスターは言います。

『わたしにとって人生とは、「一人ではなく世のため人のために生かされている

もの』と思っています。そしてサンバはすごく楽しく、すごく夢中になれる、ストレス発散や健康につながり、すご〜くイイと思う。自分が楽しければ観ている人に伝わり、観客も楽しくなる。だから自然と続き今年24年目。そして、ラーメンは、食べた人が「美味しい、ご馳走様」と言ってくれ、「ありがとう」と返す。ラーメン屋を36年続けられてるのはお客様のためになっているからだ、確信しています。以上、こんな感じでしょうか。』



写真2-4 ボリビアでのラーメン教室風景

2024年の1月、松井マスターの奥さんミーさんからLINEが届きました。2月2日に南米の日系人を対象にラーメン教室を開催すること。今回もJICAの研修コースです。当日、私も研修の現場にお邪魔しました。ブラジル、パラグアイ、ウルグアイ、アルゼンチンそしてボリビアから計7名が参加しています。ボリビアからオキナワ第2移住地婦人会の

会長、喜久山美香さんが参加していました。ラパスからも1名参加予定でしたが急遽取りやめになったそうです。



写真2-5 日本でのラーメン教室風景



写真2-6 ボリビアから研修に参加した喜久山美香さん

研修は参加者が帰国してから自信をもって皆にラーメンを披露できるよう、各自がその国で手に入る小麦と醤油を持って来ており、それら材料を使っての麺づくり、スープづくりです。研修の最後は、各参加者の麺の食べ比べも行われました。私もいただきました。生麺のおいしいこと。絶品でした。講習会を終了してマスターの言葉です。

『コロナで4年間リオのカーニバルに行

けませんでした。2025年のカーニバルには行きます。その時、また南米のどこかで講習会を開催できればと思っています。』

ボリビアでは、カイピリーニャではなく、今、チュフライを片手に13湯麺(カズサン・トンミン)のラーメンがいただけます。きっと。



写真2-7 サンバとラーメンをこよなく愛する松井ご夫妻(オキナワ移住地にて)

(終わり)

3. 初のアフリカ大陸・・タンザニア滞在記 (その3)

一般社団法人日本ボリビア協会
理事 上崎 雅也

その2では、最後にあまりに大きい中国のプレゼンスについて触れたが、今回は、中国が深く関わるITの世界からスタートしたい。

1. アフリカを席卷する中国製携帯… トップはファーウェイじゃない事実!

アフリカに来て驚いたのは、その携帯電話の普及率だ。サブサハラアフリカ(48か国)での携帯電話保有者は、2022年時

点で全人口の43%だが、この内、生産人口（15 - 64歳）だけを見ると携帯電話保有者比率は、78%と非常に高い。アフリカ大陸全体で国民の平均年齢が若い（20歳以下）のでIT対応力が高いことは、理解できるものの、それにしても驚いた。（出所：GSMアソシエーション）

タンザニアでは、多くの市民が韓国や中国製の携帯電話を使っていた。私はてっきり中国製携帯電話はITトップ企業ファーウェイの製品だといふ最近まで信じて疑わずにいた。ところが、僅か3か月前にとんでもない誤解であることが判明した。中国にはファーウェイやシャオミ、オッポ等の大手以外に数多くの中小後発メーカーが存在しており、アフリカ市場を席巻しているのは、同じ中国ながら後発企業であるTRANSSION「伝音科技」という耳にしたことのないメーカーであることが判った。中国人の知人や中国に詳しい友人も誰も耳にしたことのない社名だという。

この後発メーカーは、大手企業が支配する中国国内市場や東南アジアへの参入を後回しにして、身の丈にあった参入市場としてアフリカの発展途上国をターゲットにしたという事らしい。この目論見は見事に成功し、アフリカ携帯電話市場におけるシェアは、TRANSSIONがトップで、ファーウェイ、シャオミ、サムスンを凌ぐ。

2. 電子決済の普及 日本より進んでいる！

携帯電話が想像以上に普及している事

実は、これまでアジアでも起きてきた[リープ・フロッグ現象]そのもので最も顕著なのが携帯電話を使つての電子決済の普及だ。アフリカは、銀行口座を持つ人が少ない上、銀行やATMに足を運ぶ移動手段にも事欠く。その為に携帯電話プロバイダーが活躍する余地があったと言える。2018年の段階で、タンザニアでも中産階級以上では、スマホを使つて、日本よりも早く電子決済が、普及していた。

日本は、銀行を始め金融インフラが発達していることもあり長い間、現金決済の市場であった為、韓国や中国よりも電子決済普及が遅く、2020年のEuromonitor Internationalのデータでは、日本32.5%、韓国93.6%、中国83%であった。なお、日本は、2022年でもまだ36%に留まっている。

因みに世界で最も電子決済が普及しているのは、タンザニアの隣国ケニアで、南アフリカも世界上位に食い込む。更にデータにより数字はまちまちながらブラジル、アルゼンチン、メキシコも日本の先を走っているようだ。

まず、次の写真をご覧ください。掘建て小屋の看板に”TIGO PESA”と書かれてある。TIGOは、ボリビアでもお馴染みだが、中南米やアフリカで携帯電話会社を経営するスウェーデン企業のブランドで”PESA”とはスワヒリ語で”MONEY”を意味し「TIGO MONEY」という電子決済用マネーを意味する。

タンザニアでは、TIGO以外にソフトバンクの前身ボーダフォンの系列であるVODACOMやAIRTEL等のプロバイダー

が存在するが、どの会社もそれぞれがケ



写真3-1 首都ながら田舎町ドドマの携帯キャリア事務所

ニアで開発されたM-PESAと呼ばれる携帯による決済手段にブランド名をつけて提供している。私も現地滞在中、電気料金、携帯電話料金、ケーブルテレビ料金や航空券料金の支払いで活用させてもらった。ケニアでは、既にビットコインをやり取りするBIT PESAなるサービスも始まっており、もう既にアフリカ各国で使われているらしい。

3. ごはんの国タンザニア 美味しい！

日本では全く知られていないが、タンザニアは、ナイジェリア、ガーナ、マダガスカルに次ぐアフリカ第4位の米の生産国で、国民は非常によく米を食べる。ウガリ、キャッサバ、メイズに次ぐ炭水化物摂取源と言ってよい。自給率は、2012年以降平均して約200%と高く、アフリカで唯一輸出余力のある国としてウガンダやルワンダなどに米を輸出している。

品種的には、収量の多いアジア米と病虫害に強いアフリカ米を掛け合わせたものが多い。日本も1970年代からJICAの技術協力によりコメの収量改善に協力してき

た。現地で食べる米は、日本より長く、長粒米と言ってよいと思うが、炊き上げて蓋を開けたときの芳しい香りや口に含んだときの粘りは、日本のものと全く変わらない。食感もほんのりとしたデンプンの甘さを感じさせ、カレーライスにも丼にもお茶漬けにも有効だ。

日本では、「短粒米」と「長粒米」をそれぞれ「ジャポニカ」「インディカ」と呼び、前者は粘り気があり、後者は、パサパサだと固く信じられているが、どうやらこれは、1993年のコメ不足騒動の渦中にタイ米を緊急輸入した際に生まれた残念な誤解の様だ。炊き上がりに芳香が立ち、しっかりと粘り気もある長粒米はアジアにも南米、アフリカにも存在する。

4. 国が若い！

とにかくダルエスサラームでもドドマでも街は、若い人だらけだ。老人を殆ど見ることがない。寧ろ私が歩いているとスワヒリ語で老人を敬って使う挨拶"Shikamoo (シカモー)"と挨拶されることがある。それに対して私は、"Marahaba (マラハバ)"と応答しなければいけないのだが「マラハバ」なのか「マハラバ」なのか混乱してしまい、情けないことに最初はHelloとしか返事できなかった。

タンザニアは、若年層が多いから、役所の中で政策を検討するに当たっても一番留意しなければいけないのは、雇用の創出効果だ。その為には、外国企業の参入と技術移転を促すべきだが、タンザニアは1980年代まで社会主義国であった為、民間企業、特に外資系企業への反感が政

府内部に根強い。進出外国企業関係者からは、特に「その2」でご紹介したマグフリ大統領が2015年に就任して以降消費税の還付が遅いだけでなく、すぐに難癖をつけて還付を拒否しようとする等とすこぶる評判が良くなかった。外資を歓迎する雰囲気は薄く、むしろ「ちゃんと税金を落とせよ。」という強面の剛腕政権であった。

マグフリ大統領は、2021年3月に急逝したが、タンザニアにとっては、一つの救いであったかも知れない。

5. ジェンダー平等 日本より進んでいる！

当国に来て、意外だったのが、女性の社会進出が進んでいて、特に役所のしかるべき地位や国会議員に女性が多いことだ。2000年にスタートした国連の開発目標(MDGs)では、ジェンダー平等が大きなテーマであったが、その中で女性国会議員の比率増が大きな指標になっていた。ネットで調べたら<<https://www.globalnote.jp/post-3877.html>>、今年の最新のデータで女性議員比率が最も高いのがキューバで55.7%、次いでタンザニアの隣国ルワンダが54.7%で世界第2位。憲法で女性国会議員の比率を最低50%と定めているボリビアが未達の48.2%で第7位。タンザニアは、37.4%で第38位と立派なものだ。一方、日本は、16%で何と148位。日本は、援助を行う立場ながら、女性の権利への意識が先進国の中では、もちろん世界の中でも相当低いとみられている。

因みに以前、個人的に調べたのだがILO (International Labor Organization 国際労働機関)の女性の人権擁護に関連する条約を批准した件数は、日本が先進諸国の中でダントツに少ないという結果だった。そういう内部矛盾を抱えながら日本はOECDの主要加盟国になっている。我ら国民は、この現実をもう少し真剣に分析すべきと感じているのは、私だけだろうか。



写真3-2 頭に商品を載せた売り子

ただ、タンザニアも「その2」で示唆した通り、伝統的に男尊女卑の国らしい。特に農村部では炊事、洗濯は勿論、遠方の水源までの水汲み、薪集めは、女性の大切な仕事とされている。労力を要する仕事だ。よく目にするのが写真3-2の通り、頭上にものを載せて運ぶ「頭上運搬」と呼ばれる方法である。街を歩くと、男性も寝具や家具など重い荷物を運ぶときは、頭に載せて運んでいる。

アフリカだけでなく多くの発展途上国で見られる運搬方法だが、昔は、日本でも盛んにおこなわれていたらしい。こんな写真をネットで見つけた。



写真3-3 昔は日本にも頭上運搬があった。



写真3-4 水汲みの女性。青年海外協力隊員と

因みにタンザニア農村部でフィールド調査をしている JICA 青年海外協力隊員から聞いた話をひとつ。20 代の男性隊員は、村の婦人たちと一緒に山や林で薪（落ちた枝）を集めるのだが、頭に載せる薪の量では全然、彼女たちに勝てないらしい。結構がっしりした体格の青年ながら、いつもダメ男扱いされているとか。女性隊員も水運びをしているが腕力不足でバケツを頭上まで持ち上げられず、手伝ってもらいたい。村の婦人たちが、皆、バケツを自力で持ち上げることは言うまでもない。子供の頃からの慣れもあると思うが、アフリカの人達は、骨格と肉付きが立派で基礎体力がまるで違うことに驚かされた。（その4につづく）

4. ボリビア開拓記外伝 —コロナオキナワ 疫病・災害・ 差別を生き抜いた人々—（7）

日本ボリビア協会相談役

渡邊 英樹

だい ぶ かいたくさいぜんせん
第三部 ジャングル開拓最前線

げんせいりん なか せいかつ
原生林の中の生活

きけんせいぶつ たたか
危険生物との戦い

わたし ちゃくにん ねん じてん
私が着任した1969年の時点では

コロナサンフアンは14年、2年間の

流浪生活を余儀なくされたコロナオキ

ナワも、現在の移住地に入植してから

でも、すでに13年を経過していた。従

って私自身は、未開のジャングルに

入植した当初の様子を見ていない。そ

頃の様子を文才のないものが想像をた

くましくして、おどろおどろしい文字を

並べて説明してみても、真実を伝えるこ

とはできない。

さいきん なか
最近では、テレビでジャングルの中、

げいのうにん たいけん しょうかい ばんぐみ ほうえい
芸能人の体験を紹介する番組が放映さ

れたりするが、取材予算もあり食糧、

いやくひんなど じゅんびばんたん げんち
テント、医薬品等の準備万端で現地の

あんないにん つ しゅざい みかい ち ちが
案内人を付けての取材は未開の地とは違

う。

ほんとう せいかつ
本当の生活は、おそらくは、たとえ、

おの なた てつせいひん
チェーンソーや斧、鉋などの鉄製品があっ

こじんこじん としゅ いど
たとしても個人個人が徒手で挑むジャン

かいほう こだいじん しゅりょうせいかつ
グルの開発は、古代人が、狩猟生活から
のうこうせいかつ か とき あじ こんなん
農耕生活へと変わる時に味わった困難に
ちか
近いものがあつたはずだ。

にゅうしょくとうしよ たいへん おも なん
「入植当初の大変な思い」とか「何
こうち せんじゅうみん かいたく
で高地の先住民は、ジャングルの開拓で
いや せつめい か
嫌がったのか」ということの説明の代わ
みづか せいかつ たいけん しょうかい ほう
りに、自らの生活と体験を紹介した方
よ ひと げんせいりん
が、読む人にとっては、かえって原生林
なか せいかつ そうぞう ようい
の中での生活を想像するのが容易になる
おも
と思う。



写真4-1 オキナワ第2コロニア中心地を拓く山崎興喜氏と友利金三郎氏(1959年)

かいたく
ジャングルを開拓するということは、
きけんせいぶつ たたか い いちめん
危険生物との戦いと言ってもよい一面が
あるからだ。それほどに人を悩ませた。
た にちじょう あ
それに耐えるのが日常で、それが当たり
まえ ちやくにん ころ
前になっていく。着任した頃は、サンタ
し まわ げんせいりん じゅかい
クルス市そのものも周りを原生林の樹海
かこ まちば
に囲まれていた。まがりなりにも街場ら
せいかつ だいせいどう
しい生活ができたのはカテドラル(大聖堂)
してん はんけい だい かんじょうせん うち
を支点として半径2キロの第2環状線の内

がわ
側だけであつた。

がいちゅう むえん
それでも害虫とは無縁でいられなかつ
た。それは、いっばんてき そうぞう どくへび
一般的に想像される毒蛇、
どく たく
サソリ、毒グモといった類いのものでは
にんげん なや
なく小さいものほど人間を悩ませるのだ
つた。



写真4-2 入植当初に建てた板張りヤシの葉葺きのコロニアオキナワの家(1969年筆者撮影)

ちやくにん おし くつした
着任してすぐに教えられたのは、靴下
たく すべ せんたくもの
の類いまで、全ての洗濯物はアイロンを
あ
しっかりと当てるということであつた。
にほんじん せんひき むし
日本人は「千匹ビッチョ(虫)」と呼
んでいたが、たく かん
アブの類いが干してある
いるい たまご う
衣類に卵を産みつけるとのこと。

き ちゃくい
それに気がつかないまま、着衣してし
か むし ひ ふ なか
まうとふ化したウジ虫が皮膚の中に
なんじゅつびき もぐ こ
何十匹と潜り込む。

ふせ む め
それを防ぐために縫い目などにもアイ
ていねい ふちゃく たまご や ころ
ロンを丁寧に掛けて付着した卵を焼き殺
さないとならないのだという。

とうじ しない でんりょくじじょう わる しゅう
当時は市内でも電力事情が悪く、週

かい ていでん でんあつ よわ
2回の停電もあり電圧も弱かったため
でんき おこ すみ
電気アイロンではなく、熾した炭をいれ
つか しゅふ
たアイロンを使っていたので、主婦には
ふたん おお しごと
負担の多い仕事になった。
さいわ われわれ ひがい
幸い我々は、その被害にあうことはな
かったが、わ や あいけん
我が家の愛犬シェパードのダン
ディが、これにやられた。獣医のところ
つ ころ
ろに連れていった。ウジ殺しのガスを
りょうみみ ちゆうにゆう
両耳に注入されたダンディがブルブル
あたま ふ ゆか かぞ
と頭を振ったら、床に数えきれないほど
むし しがい だ と ち
のウジ虫の死骸がはじき出されて飛び散
った。

むすう ぼくじょう
ハエは、どこにでも無数にいた。牧場
ちか しょくじ わら
の近くで食事をしようものなら、笑った
しゅんかん くち と こ なんと
瞬間に口に飛び込まれたことも何度かあ
か じょうたい
った。蚊もいるのが常態。コロニアオキ
こうおんたしつ
ナワより、高温多湿なコロニアサンフア
りゅうこう なんと けいけん
ンでは、マラリアの流行を何度も経験し
ている。

あらかきようえい き
新垣庸英さんに聞いたところでは
せんぜん おきなわけんじん こうち ぼしよ
「戦前の沖縄県人がうるま耕地に場所を
さだ りゆう ひと
定めた理由の一つは、モンテローロからサ
いじゅうち いた しゅうへんちいき じゅこう
ンフアン移住地に至る周辺地域は、樹高
たか ちみゆた わ
も高く地味豊かなことは分かっていたが
こうつう こんなん びょう けいえん
交通の困難さとマラリア病を敬遠したこ
とにあった」という。しんりん なか
森林の中でランド

わだち
クルーザーが轍にはまって、ウインチで
ひ ば ととき くるま
引っ張り上げたりしている時には、車の
てんじょう か ま くら
天井が蚊で真っ黒になったこともある。
か おもしろ ぼめん み にほん
蚊では、面白い場面も見られた。日本
らいほうしゃ あんない ひと うし
からの来訪者を案内すると、その人の後
ちよっけい なが
ろだけに、直径20センチ、長さ5~60センチほどの
ま くら かばしら た りょこうしゃ
真っ黒な蚊柱が立って、それが旅行者の
うし
後ろをうなりを上げてずっとついて行く
のである。それをみて「日本人の血は甘
いんだ」とよく笑った。その一方で、
げんちじんか か す わ
現地人化して蚊にも好かれなくなった我
み かくにん
が身を確認することにもなった。

おお はだ く こ
大きなダニは、肌食い込んだものを
ひ は あたま のこ
引き剥がすと頭だけが残ることがある。
のこ く はな
残らなくても食いついたら離さないの
ごういん ひ ば じぶん はだ いっしょ
強引に引っ張ると自分の肌も一緒につい
てくることになる。さいしょ
最初のころ、それを
し こんせき いま みぎうで のこ
知らずにやった痕跡が今も右腕に残って
いる。ライター等で焼き殺してから、剥
がすのが正解。

ちい は いちばん
それより、ぐっと小さい葉ダニが一番
やっかい やまある ひざたけ
厄介である。山歩きをしていると、膝丈
は わ すす
くらいの葉をかき分けて進むことは、い
くらでもある。そんな葉の裏に小さいダ
ニがむすう は うら ちい
ニが無数にいる。その葉にズボンがふ
たらもうおしまいである。き
気がつかない

あいだ からだ なか はい こ わき した こかん
 間に体の中に入り込み、脇の下や股間
 やわ く こ くる だ
 の柔らかいところに食い込む。狂い出し
 かゆ あ
 たくなるほど痒いがランプの明かりでは
 み ねむ
 見つけてつぶすことができない。眠れぬ
 かゆ た
 痒さに耐えかねて、ガソリンをかぶった
 こともある。



写真4-3 第2コロニアに建設中の海外移住事業団オキナワ事業所と職員宿舎。その奥は畜産試験場用地(1970年筆者撮影)

さいしょ だい
 コロニアオキナワは、最初に第1コロ
 ニアから始まって第2・第3へと拡大して
 いじゅうしゃぜんたい りべんせい はか
 いったので、移住者全体の利便性を図る
 かんてん だい じぎょうしょ
 観点から第1コロニアにあった事業所を
 はいし あら
 廃止して、新たにコロニアオキナワを
 ほんかくしえん かいがいがいじゅうじぎょうだん
 本格支援するために、海外移住事業団は
 じぎょうしょ どぼくきかい せいびこうじょう
 オキナワ事業所と土木機械の整備工場及
 しょくいんしゆくしゃ だい つく
 び職員宿舎を第2コロニアに造った。
 げんせいりん ぼっさい つく とうしょ ちい ちい
 原生林を伐採して造った当初は小さい小
 なや あみど
 さいブヨに悩まされた。網戸をくぐって
 ちい よ さ
 くる小ささで「イヘーネ」と呼んでいた。刺
 とき き
 されている時は全く気がつかない。すぐ
 かゆ かん
 に痒みも感じない。しかし、しばらくし

かん かゆ さいしょ ころ
 て感じる痒みはしつこかった。最初の頃
 もど かかゆ
 はサンタクルスに戻っても3~4日痒か
 な かゆ
 った。これも慣れてくると痒みもあまり
 かん じぞくじかん みじか
 感じなくなり、持続時間も短くなった。
 にほん らいほうしゃ たいへん
 しかし、日本からの来訪者は、大変だっ
 ゆうしょく とも あいだ
 た。夕食を共にしている間だけで、
 くつした あいだ はだ ろしゆつぶぶん
 靴下とステテコの間肌の露出部分をや
 ま か ふく あ わ
 られて、真っ赤に膨れ上がった輪がぐる
 ひとまわ
 りと一回りできた。

がいちゆう ひと し いた
 それでもこれらの害虫は、人を死に至
 われわれ
 らしめることはほとんどない。我々が、
 けいかい たいちよう み
 もっとも警戒したのは体長3センチにも満た
 むし
 ない「サシガメ」という虫だ。ボリビア
 ちゅうなんべいぜんたい はつびょうしゃ おお
 だけでなく、中南米全体に発病者の多
 だいに おそ
 い「第二のエイズ」といわれる恐ろしい
 びょうき びょう もと むし
 病気「シャーガス病」の元になる虫であ
 ひ ぼ いたば いえ ひそ
 る。日干しレンガや板張りの家に潜んで
 おお
 いるケースが多い。サンタクルスでも
 じたく あみど は はつけん
 自宅の網戸に張りついているのを発見し
 むし
 て、ギョツとしたこともあった。この虫
 ひと ねむ あいだ きゆうけつ
 が、人の眠っている間に吸血して、そ
 ば ふん ふん なか きせいちゆう
 の場に糞をする。糞の中にいる寄生虫ク
 じんたい しんにゆう
 ルーズトリパノソーマが人体に侵入して
 びょう ひ お せんぶくきかん
 シャーガス病を引き起こす。潜伏期間が
 なが かんせん わ なんじゅうねん
 長く、感染したのも分からず、何十年も
 はつびょう ちんもく やまい
 たって発病するので「沈黙の病」とも

いわれる。発病すると心臓をやられる。
戦前に移住した沖縄県人の2世の方も
この病気で心臓にペースメーカーを入れ
ていたが、当時、電池の寿命が1年であ
ったから毎年サンパウロの病院まで行っ
て電池交換の手術を受けていた。その
費用が大変なので、教会の援助を受けて
いると話してくれた。

現在日本在住のボリビア人に対するこ
の病気の検査に日本ボリビア協会も後援
して日本赤十字社で行ってもらっている
が、毎年数人の陽性者が出て驚かされる
。南米全体で、六、七百万人の感染者

がいるといわれているのもうなずける。
南米各国の平均寿命が短いのは、こ
の病気が一因となっている。最近、特に
注目すべきは、生のアサイージュースや

サトウキビジュースにも病原体がいると
いわれるようになったことである。南米
の街角で売っている生のジュースは用心
する必要があるようだ。(つづく)

注記：これまでの写真および図は「コロナオキナ
ワ入植50周年記念誌」から引用。
※本書は、日系2世の人たちが読みやすいように
全漢字ルビをふっています。



琉球新報社のご厚意で転
載させていただきます。
ご関心を持たれた方は下
記琉球新報社URLをご覧
ください。

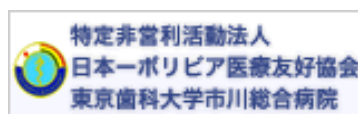
<https://storeryukyushinpo.jp>

★スペイン語版が発刊されました☆

『BOLIVIA REGISTRO DE UNA HISTORIA PARALERA』 明
石書店(2500円+税)

編集委員

椿 秀洋 細萱 恵子 大川裕司



Copyright© 2002-2024

一般社団法人日本ボリビア協会
ASOCIACIÓN NIPPON-BOLIVIA

All rights Reserved

(本誌の全ての掲載記事、写真、図表などの複製、転載、改変は禁止されています)